

I 学校の概要

読解力向上推進モデル校事業 坂出市立川津小学校

◆児童及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
2学級 36名	2学級 45名	1学級 34名	2学級 38名	2学級 60名	2学級 43名	2学級 9名	13学級 265名

○教員数 22名

◆学校の特徴

昨年度、本校は香小研国語科研究会の開催にあたり、「主体的に考え行動する児童の育成～ことばのよさを感じ、ことばで思いを表現する授業づくり～」を主題に掲げ研究を進めてきた。児童の大きな課題である語彙力や言語能力の弱さを改善してより主体的な学びに向かうために、「ことば」のもつ力やよさに着目し、想像を広げながら読む活動や、表現を工夫して書く活動、考えを伝え広げる話し合い活動を重視した授業づくりに取り組んだ。研究の成果として、児童が自分の考えを伝えたいという思いをもち、スムーズな交流活動に結びつけられるようになったことが挙げられる。その基盤の一つに、朝の常時活動でペアやグループで話をつなぐ対話トレーニング「お話チャレンジ」の取組を継続してきたことがある。実践を通して、対話により自分の考えが相手に伝わる喜び、そして自分の考えが広がっていく楽しさを、多くの児童が実感できている。

II 研究主題等

研究主題

主体的に考え、行動する児童の育成

～読解力を高める指導を通して～

◆研究主題設定の理由

昨今、「PISA型読解力（自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考する能力）」の低下が問題視され、その改善に向けた具体的な取組を行うことが重要課題の1つとなっている。それは本校児童においても同様であり、県学習状況調査では、例年、文章の読解や記述に関わる問題の正答率が特に低い傾向にある。その原因として、文章解釈の不十分さや、考えや理由を明確に論述する力の弱さが挙げられる。昨年度までの研究で、児童の学習意欲の向上や話し合い活動の活性化が成果として見られた一方で、書かれたテキストを理解する力や自分の考えを形成して書く力といった、学力の基盤となる読解力の育成においては大きな課題が残った。そこで今年度は、より児童が主体となり自らの課題解決のために学びを深めていくことができるよう、「読解力向上」を研究テーマに据え、授業改善の道筋を探っていくこととした。

◆研究内容及び方法

本校では「読解力」を「文章や図表などの意味を正しく理解し、必要な情報を自らの知識や経験に位置付けて考えを形成し、適切に表現すること。」と定義した。読解力を高めるための指導においては、この定義に基づく3つのプロセスを段階的に取り入れた授業を構成することが重要である。また、読解力を支えるための基盤として、文章を読み解くためのスキルである「汎用的基礎読解力」（新井紀子「AIに負けない子どもを育てる」より引用）を身に付けていく必要がある。以下に、読解力を高めるための3つのプロセスについて、そして、「汎用的基礎読解力」を身に付けるための常時活動について述べる。

(1) 読解力を高める3つのプロセス

【プロセス① 文章や図表などの意味を正しく理解する】

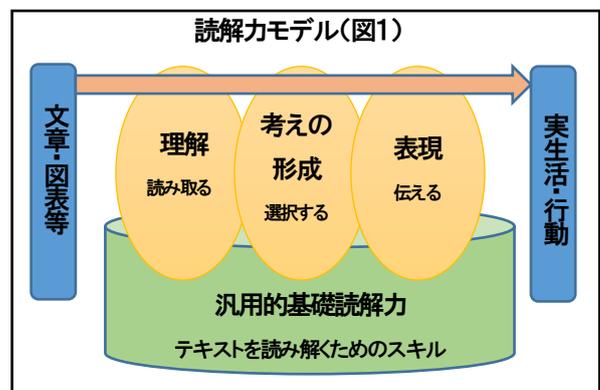
ことばの意味や文の構造を理解したり、グラフや図などの資料の数値を正確に読み取ったり等、インプットするための手立てとして、「必要な言葉や数値に線を引く」「図式化して構造化する」「言葉の意味を調べる」といった具体例が挙げられる。その際、線の色や引き方、印の付け方、図表の書き方等、教師の指示を明確にした上で発問し、正しい文章や図表の解釈につなげていく。それらの活動が困難な児童に対する支援として、「非言語情報（図、写真など）を提示する」「情報量を減らした文章や図表を提示する」「読み取りやすくするための補助線を引く」といった具体例が挙げられる。自力解決が難しい児童それぞれの課題を教師が見取り、必要な支援を講じることで、どの児童も意欲を保ちながら学習できるようにする。

【プロセス② 必要な情報を自らの知識や経験に位置付けて考えを形成する】

文章や図表などを読んで分かったことの中から、課題解決に結び付く情報を選び出していく際には、「学習課題が児童の目的と一致しているか」が重要である。必要な情報を選択できない児童には、情報量を制限したり、学習課題に立ち返って発問を精選したりして、必要な情報を絞らせるようにする。そして、それらの情報の共通点や相違点を見付けて関連付けたり、「～でなかったら」「もし～だったら」といったように批判的・仮定的に読み解いたりして考えながら、情報を意味付けていく。

【プロセス③ 適切に表現する】

読み取った情報や形成された考えをさらに自分の中に落とし込むには、それらを適切にアウトプットする場が必要である。なぜなら、自分の考えを書いたり話したりしようとする過程の中で、曖昧だった概念が論理的に整理され、再構築されるからである。また、自分の考えを明確に伝えるにはどの手段を用いると効果的か、相手意識をもつことも重要である。「書く・話す・示す」といったあらゆるアウトプットの手段を用いて表現することを繰り返し、読解力を育成していく。



(2) 汎用的基礎読解力を身に付けるための常時活動 (朝のチャレンジタイム)

昨年度まで、朝のチャレンジタイムで、「読書・書く・話す」を中心に言語能力向上のトレーニングを実施した。今年度はそれに加え、児童の読解力を支えるスキル（汎用的基礎読解力）を身に付けるため、右に示した①～⑥の視点を踏まえた活動を取り入れ、「読み解くチャレンジ」を定期的に取り入れていく。文づくりのゲームを通して文の構造を把握する感覚を養ったり、新聞記事などを読んで内容を簡単にまとめたりといった活動を行う予定である。昨年度のチャレンジタイムについての児童アンケートによると、9割以上の児童が「楽しかった」と答えた。問題に対する正答を求める活動ではなく、思考や会話、交流を重視したことにより、そのような結果となったのではないかと考える。今年度も、児童が楽しみながら、読解力向上につながる活動を工夫して実践していきたい。

【汎用的基礎読解力の六つの分類】

- ①係り受け解析…文の基本構造（主語・述語・目的語など）を把握する力。
- ②照応解決……指示代名詞（これ、それ、あれ、これら等）が指すものや、省略された主語や目的語を把握する力。
- ③同義文判定……2文の意味が同一であるかどうかを正しく判定する力。語彙上の言い換えや、受動態可能動態か、等。
- ④推論……小学校6年生レベルの基本的な知識と日常生活から得られる常識を動員して、文の意味を理解する力。
- ⑤イメージ同定…文章を図やグラフと比べて、内容が一致しているかどうかを認識する能力。文章で表現された内容と図が対応しているか見極める。
- ⑥具体的同定……言葉の定義を読んで、それと合致する具体例を認識する能力。辞書に書かれているような定義文を理解し、具体的な例がそれに当てはまるか判定する。

Ⅲ 成果の評価計画（検証方法）

- ・令和6年5月、児童の読解力の実態を調査するために、汎用的基礎読解力の6つの分類に基づいたテストを作成、実施する。低学年は主に①係り受け解析と②照応解決の問題、中学年は低学年の内容に加え、簡単な新聞記事の内容を読み取る問題、高学年は読売新聞社発行「よむYOMUワークシート」の問題を取り上げる。11月に再度、同系統のテスト問題で調査し、変容を見取る。
- ・昨年度も行った「チャレンジタイムアンケート」を、今年度も5月と11月に実施する。①チャレンジタイムが楽しいか、②どんな時に楽しいと感じるか、③文を読むのが好きか、④文を書くのが好きか、⑤話し合い活動が好きか、の項目について調査し変容を見取る。
- ・R5 香川県学習状況調査の国語科の問題のうち、内容2「⑤書くこと」と「⑥読むこと」の正答率を基準値とし、R6 香川県学習状況調査の同問題の正答率を5ポイント上昇させることを目標値とする。
基準値 R5 年度学習状況調査国語科結果「⑤書くこと」の正答率・・・54.9%（県平均52.5%）
「⑥読むこと」の正答率・・・46.5%（県平均56.1%）
- ・教師が読解力向上の視点に基づいた授業実践を行い、発言やノートの記述等から読解力に関わる成果と課題を見出す。

Ⅳ 研究成果の普及方法

- ・研究発表 香川の教育づくり発表会 令和6年12月26日（木）
- ・公開授業 坂綾小研研究発表会 算数科 令和6年 5月29日（水）
坂綾小研研究発表会 人権同和教育 令和6年 6月12日（水）
坂綾小研研究発表会 社会科 令和6年10月16日（水）
自主公開研究発表会 国語科 令和6年 5月 8日（水）
自主公開研究発表会 道徳科 令和6年 9月11日（水）
自主公開研究発表会 総合的な学習 令和7年 2月12日（水）
- ・自主公開研究会において、指導主事に研究討議後の指導をお願いし、指導を受けた実践のまとめを自校ホームページで公開する。